



ニッポン ドクター和の 臨終図巻

10月16日はグリーンリボンデーでした。東京タワーなど全国150カ所が、緑色にライトアップされました。「グリーンリボン」は移植医療のシンボルで、日本は今年、臓器移植法の施行から25年の節目を迎えます。さて、臓器移植の歴史を振り返るとき、この人の存在を無視して語ることはできません。

腎臓がん患者などから摘出した本来捨てるはずの腎臓を、病巣を摘出し別の腎臓病の患者さんに移植する「病気腎移植」で知られた万波誠医師が、10月14日に岡山県内の病院で亡くなりました。享年81。死因は、心筋梗塞との発表です。

僕には「仕事が一段落ついたら、いざれお会いして対話したい」と思っていた医師が何人かいました。偉大な先輩方とともに医療の本質を探る「老医を訪ねる」というインタビュー集を出版した

277 医師 万波誠



長尾和宏(ながお・かずひろ) 医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

しかし日常の煩雑さに追われ、気づけば僕自身が老医の領域へと足を踏み入れ、会いたい人はどんどん鬼籍に入っていく。万波医師は会いたい人の筆頭でした。残念です。

今、僕の手元に『だれが修復腎

現代医療のガリレオ・ガリレイ

移植をつぶすのか」(高橋幸春著、東洋経済新報社/2015年刊)という本があります。

腎臓病に苦しむ患者さんの苦しみに答えるべく、万波医師ら「瀬戸内グループ」と呼ばれる4人の医師は、1991年から宇和島市の市立病院と徳洲会病院などで42件の「病気腎移植」を実施し、2006年11月に公表をします。これは透析患者さんにとって希望の光でした。

しかし日本移植学会のお偉いさん方から批判が上がリ、当時マス

コミは、万波氏を束になつてこるし上げました。「人体実験」「猟奇的犯行」「悪魔の所業」…そんなおどろおどろしい言葉でバッシングされます。厚生労働省も動き出し、万波医師は、病気腎移植を中止せざるを得ませんでした。その信念を曲げることはありませんでした。

今も昔もイチャモンをつけてくるのは、患者さんの苦しみを見ていない、評論家気取りの暇人たちです。僕も今、「ワクチン後遺症」をめぐって日々批判を浴びている身なので万波医師の孤独感と恐怖を他人事とは思えず、本を讀むと泣けてきます。

そして、万波医師は正しかった。その後、「病気腎移植」は先進医療として認められました。果たして、たいた記者たちは万波医師に謝罪をしたのでしょうか。いや、そんな謝罪はなくとも「万波医師のおかげで生きられた」という患者さんたちの声こそが尊い供花。彼が現代医療のガリレオ・ガリレイであったことを証明してくれています。